

大学改革に関する意見

今後の日本社会の状況を考えるにあたり、人生 100 年時代の到来についてはもちろん少子化による人口減少、世代別人口割合の変化、そのことに伴う社会構造の変化に対応する教育が求められると考えています。

人口減少、特に若い世代の減少については、そのまま労働力の減少に直結しますし、消費減による国内市場の縮小にもつながります。日本企業にとってはこれまで以上にグローバルな市場に出ていくことが必要不可欠となってくるのではないのでしょうか。そのためにも大学においてグローバルに活躍できる人材を育てていくことが必要になってくると考えます。

また、リカレント教育の受け皿としての大学、大学院の果たす役割は大きいと感じています。学びなおし人材の受け入れを進めていくことは、ローカルで活躍する人材をより成長させることにもつながるはずで。

グローバルな場においても、ローカルな場においても、活躍できる人材を育てていくための大学での学びの機会を重要だと考え、以下の提案をさせていただきます。

【グローバルに活躍できる人材の育成】

まず、近年日本の大学の国際的な評価が低くなってしまっていますが、それを再び高めていくことが重要です。そのためにも評価基準の策定は課題としてありますが、評価の高い大学へ国立大学交付金、私学助成金選択を重点的に支援していき、トップレベルを引き上げることが必要ではないかと考えます。

また、私は引退後に FIFA マスターというスポーツ学の修士課程に進みましたが、24 か国 30 名の同期生とともに、最初はイギリスのレスター大学で歴史・人文学、次にイタリアのミラノにあるボッコニー大学でマーケティング、そして最後にスイスのニューシャテル大学で法学といったように強みのある大学を回ってスポーツを多角的に理解する目を養うことができました。私は 13 期生でしたが、国際的なスポーツの世界で働く修了生ネットワークがあり、そこからいろいろな情報を得ることができます。

FIFA マスターは一例ではありますが、たとえば大学の枠を超えて、国際的に評価が高い大学、大学院との連携などを積極的に進めていくなど、日本でグローバルな教育課程を受講できる機会を増やしていくなどで、日本の学生がよりレベルの高い教育を受けることも可能になりますし、海外の優秀な学生が留学先として日本を選択することも増えます。優秀な留学生が増えることで、日本人の学生にとっても自国にいながらグローバ

ルな交流をする機会がもてますし、今後の人的なネットワークの広がりを考えても重要だと考えます。

ただし、それと同時に留学生を受け入れるにあたっての阻害要因を取り除くことも重要です。これは大学側の受け入れ態勢の問題だけでなく、たとえば留学生が卒業後に日系企業へ就職する際の就労ビザ取得条件を緩和する、日系企業が自社のもうける条件に適合する優秀な留学生に条件付きの奨学金を給付する、留学生の採用枠を設けたりする、などの官民あがての取り組みも必要ではないでしょうか。

大学側も英語やその他の主要言語での講義を増やす、留学生受け入れのための職員を増やすなどの取り組みは必要です。そのために教職員の研修機会を設け、レベルアップを図っていくことが重要になります。

【リカレント教育の場としての役割】

大学および大学院が人生 100 年時代のリカレント教育の受け皿として機能していくために、幅広い人材を受け入れるためのフレキシブルな課程を設置することが必要です。

J リーグの現役選手の中にも早稲田大学人間科学部 e スクールの特別選抜枠を利用して学んでいる選手がいますが、18 歳人口が減少している中で、社会人が働きながら学ぶことを可能にする課程を充実させていくべきです。

以前には夜間学部という選択肢を持っている大学も多くありましたが、今ではだいぶ少なくなっていると聞きます。夜間学部のニーズ自体は減少しているのかもしれませんが、たとえば昼、夜でわけることのないフレックスな課程などを充実させることはできないでしょうか。

また、研究に注力する大学、より実践的な学びを追求する大学、地域社会の中で核となるような大学など、それぞれの大学に特色が出やすくするなど、大学ごとに機能分化を促進していくこともそれぞれの大学の差別化につながります。

特に地域のコミュニティにおいて大学の持つ施設や知見、ネットワークなどは非常に大きな資産になる可能性を持っています。大学が地域活性化の核になり果たせる役割は大きいはずで、大学の施設を使った総合型地域スポーツクラブを運営し、地域住民へのスポーツ施設の開放を促進していくなども可能性があるでしょうし、地元経済界と連携して大学の科目等履修などで研修を行うことで、ビジネスマッチング的な効果も生まれるかもしれません。

大学が核となって地域コミュニティと連携していくことがリカレント教育の受け皿となりえる可能性が増えていくのではないのでしょうか。

以上